【なぜケニアに行くのか】

東京大学工学部３年　佐野健太

今回、自分がケニアに行く理由は、大きく分けて二つあります。

まず、自分は発展途上国の開発や貧困問題に関心を抱いており、それに関連して、国際プロジェクトにも興味を持っておりました。その関心から、交代でさまざまな分野で国際プロジェクトをなさっている方々が彼らのなさっていることを紹介してくださり、そして、それについてグループディスカッションをするという東京大学での「実践国際プロジェクト」という講義を受講しておりました。

その講義にて、木村先生が東京大学までいらしていただき、彼がなさっている道普請人のお話された際に、自分はその活動内容に大変興味を抱きました。住民に自分自身の手で、自分自身のために行動させる。このような援助側はあくまでも補助役に徹して、現地のことは現地の住民自身にやらせる、というコンセプトは、持続可能な発展を促すためには必要不可欠なことであると、自分は考えておりましたので、その点に大変共感いたしました。

加えて、道普請人ではケニアに事務所を持っている、というお話を伺い、アフリカにも関心を抱いておりました自分としましては、ぜひとも実際にケニアに行って、その活動を体験してみたい、と思うようになりました。現地の人々や文化に実際に肌で触れるという経験は、なかなか出来るものではないですし、長期休暇がある学生という特権を生かして、このような機会にぜひとも未知の地に行ってみたい、という意思もありました。

学生という立場でこのような現地住民の方々と同じ目線に立って、同じことを体験し、同じことを考えるという経験は大変貴重なものになるであろうと感じております。

多くの経験をつんで、自分自身が成長するとともに、今後の人生の糧にして、社会に還元したいと考えております。

【感想文】

東京大学工学部 4 年　佐野健太

　今回、道普請人の活動、ならびに、ケニアのエルドレットでのホームステイに短期間ながらも参加させていただきました。ケニアでの滞在を通じて、大変貴重な経験をさせていただき、多くの方々と交流でき、また、いろいろなことを考える機会を与えていただきました。

　そこで簡単にではありますが、滞在期間中に自分がケニアという国や現地の様子について感じたこと、加えて、道普請人の活動についての感想を述べさせていただきます。

　ケニアに到着して、最初に思ったことは、日本の製品が数多く使用されている、ということです。ほぼ全ての車両は日本発企業のトヨタや三菱でしたし、SONY や日立、SEIKO の電化製品も数多く目にしました。日本の技術力は高い、ということは、日本国内にいてもしばしば耳にしますが、アフリカにおいても、日本製品があふれている光景を目にしたことで、あらためて、技術国としての日本を再認識しました。

　そのような技術国としての日本に関心があってか、あるいは、日本人の観光客が多いとか、日本の政府開発援助が高い評価を受けているなどの他の理由があってかはわかりませんが、ケニア人の日本人に対する関心が高く、空港の受付の方が日本の首相を管直人であると知っていたことには驚きました。

　また、それに関連して、現地の方にとっては、アジア人の区別がつかないらしく、よく中国人に間違われました。それは、なんら不思議なことではないので驚きはしなかったのですが、中国人ではなく日本人だとわかると、大げさなほどに謝罪された点には違和感を覚えました。現地における中国人の評判はあまりよくない、と耳にしたことがありますが、それと関係していたのかもしれません。

　さて、次にナイロビから飛行機で 1 時間ほど飛んだ先にあるエルドレットでのホームステイを通して感じたことについて記させていただきます。現地の方とともに生活し、直接触れ合う機会を得ることが出来たため、短期間の滞在ではありましたが、比較的多くのことを経験することができ、彼らの生活の内部にまで入ることができたと思っております。

　まず、ケニア人の国民性についてです。一概に国民性という言い方でその国の人全てに当てはまるような性格を言い表せることが出来るとは思っておりませんし、そうである

べきではないとさえ思っておりますが、日本人と比較した際に、外部の人間を歓迎するという意識が高い点と、時間や仕事に対する意識が異なる点という二点に自分は注目いたしました。

一点目ですが、ケニア人に広く普及しているキリスト教の影響からか、ほぼ全てのお会いした方々から、非常に温かくもてなしていただき、すごく好感を覚えました。そのうちの一人の方が、出逢いは一期一会だから最大限のもてなしをする、ということをおっしゃったときには、その精神を見習わなくては、ということを強く感じました。

二点目については、現地に到着する前から意識していたことでしたので、驚きはしませんでしたが、仕事に取り組む際の意識や、時間に対する感覚が日本人と比べて圧倒的に、低い・ルーズでした。飛行機や待ち合わせの遅れは当たり前ですし、そもそも、予定の時間は明確に決めないようでした。たとえば、乗り合いバスなどで、出発時間は決まっておらず、人が集まったら出発する、という方式でした。個人的には、日本のような勤勉さや時間をきっちりと守るという習慣はいいことだと思いつつも、そうではない文化に対しても寛容な姿勢をとりたいと意識しているので、特に、この点については違和感や嫌悪感というものは覚えませんでした。

これに加えて、国民性ではないのですが、民族の多様性については、日本で全くといっていいほど意識したことがなかったので、すごく考えさせられました。日本には、民族が一種だけですので、全ての人は日本語という共通言語で意思疎通を図れますし、今では国際化の影響を受けて、多くの人が英語の勉強をしておりますが、国外に行く意思のない人は、日本語以外の言語を学ぶインセンティブというものがありませんでした。つまり、一つの言語を話すことが出来れば、生活に困ることはありません。しかしながら、ケニアには数十もの民族が存在し、各々の民族が使用している言語が異なるため、国外に行く意思がない人でも、他民族と意思疎通を図る際には、他の言語を話せる必要がありますし、小学校の時点から英語による学習が始まるようで、三つ以上の言語を話せる人が数多くいらっしゃるという点には衝撃を受けました。

次に、建築物や町の様子についてですが、水道、電気、ガスが通っていない、という点が日本との大きな違いだと思います。水道、電気、ガスがない生活というものを今まで経験したことがなかったので、それが当たり前の生活とはどういうものであるのか、ということを体験することが出来て、非常によい経験となりました。日本ではこれらのライフラインをどれほど頼っているのか、というのを考えさせられるとともに、それらがなくても生活することは十分可能だなぁ、とも思いました。

町の様子としては、電気が通っていないため信号はなく、それに加えて、ガードレールや車線、横断歩道もなく、道の舗装もままならず砂埃もすごい状態でした。先進国から中古の車を輸入しているため、車は多く走っているのですが、安全の体制が整っていないため、よく事故が起こってしまうようで、不幸にも自分の短期間の滞在中に、ホームステイ先の先生をなさっているお父さんの生徒が車に轢かれて死んでしまった、との話を聞いて、やるせない気持ちになりました。

続いて、道普請人の活動についてです。はじめに経験させていただいた道直しにおいては、上記で述べた国民性の違いもあってか、現地の人たちは活動に対して、そこまで積極性がないように感じました。実際に体験するまでは、自分の国の道は自分たちで直す、という道普請人の理念に現地の人も共感しているのであろうと推測しておりましたが、自分たちで自分の国の道を直すと言っても、現地の車を持っていない人たちにとって、道を直すことにそこまでのインセンティブはない、ということを気づかされ、プロジェクトの難しさというものを改めて実感いたしました。つまり、活動している方々にとっての主なインセンティブは給料だけであり、インセンティブがないと働かないのは当然であるように感じました。それを踏まえたうえで、効率的な制度やルールを作って、全員が仕事に対して積極的に取り組めるようなシステムを作れないかなぁ、と考えておりました。

また、パナソニックさんに助成していただいている小学校・幼稚園の生徒たちに土のう袋に夢・未来の絵を描いてもらう、というプロジェクトは、生徒たちを始めとして、関係者たちに活動の意味を知らせるという普及活動の意味においても、実際に現場で働く人たちにもとっても生徒たちが描いたものだとやる気が出るという意味でもよい案だな、と感心しました。

最後に、道普請人の活動とホームステイをさせていただいたエルドレットはあくまでもケニアの中でも首都から離れた地域であり、同じケニアでも首都のナイロビの状況とは異なる点が多くある、ということをホームステイ後のナイロビの滞在を経て感じました。ナイロビでは電気がしっかり通っておりましたし、道も舗装され、水道も通っておりました。車もエルドレットの古い中古車とは比較にならないほどきれいなものが多く、道路沿いには高い建物や光る広告も沢山ありました。

今回の旅行を通じて、客観的に日本や自分を見つめなおす契機を得ることができ、また、多くのことを考える機会を与えていただき、多様な価値観と触れ合うことが出来ました。今後とも、学ぶ姿勢を忘れずに、今回の経験を生かして、積極的に行動していきたいと考えております。